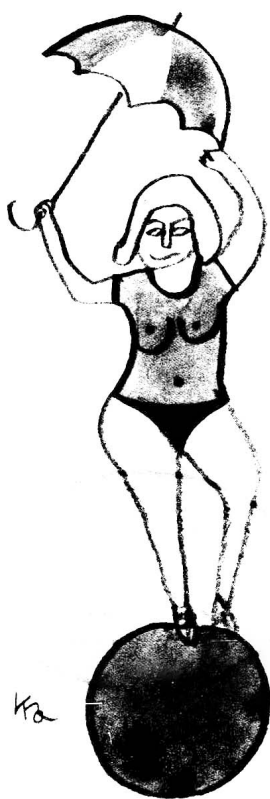


アメリカ座に雨が降る

佐藤愛子

アメリカ座に雨が降る

佐藤愛子



講談社

アメリカ座に雨が降る

昭和四十七年七月十二日 第一刷発行

著者 佐藤愛子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―一二 郵便番号 一一二

電話 東京 (〇三) 九四五―一一一 (大代表)

振替 東京 三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定価 五〇〇円 落丁本、乱丁本はおとりかえいたします。

© 佐藤愛子 昭和四十七年 Printed in Japan



目次

アメリカ座に雨が降る

5

男の面目

59

悲痛なる好色家

95

春の女

151

昭和元禄退屈男

191

裝幀
||
風間
完

アメリカ座に雨が降る

1

春野リリーが出て行ってしまったので、ローズ一座のストリッパーは座長の紅^{くれない}ローズを入れて三人になってしまった。何年か前まではローズ一座は十人以上の大世帯だった。コメディアンも専属がいたし、衣裳係もいた。ストリップ全盛時代のことだ。どの町にもローズのファンがいて、楽屋に花やケーキが届けられた。実際、その頃のローズは、花の女神^メなどといわれたものだ。ローズの身体はたつぷりと大きく威風があり、尻にしろふと腿にしる肩にしる、普通の女^メとは違う、何か特別に作られたものという感じがあつた。その肌はシミひとつなく、何の手入もしないのに不思議な桃色に光っている。そんなローズは舞台に立つてもニコリともしないのである。

ローズの身体の中で、もし欠点を探すとしたら、その乳房の大きすぎることもあったかもしれない。ローズの髪は漆黒で太く長かった。頭をゆすると肩を蔽^{おほ}っているその髪が崩れてマクワ瓜のようにつき出た乳房が現れる。すると男たちは目を凝^こらし、凝然^{ぎようぜん}と息を吞んでそれに威圧

された。その頃の客は乳房が大きければ満足したものだ。

どの小屋へ行ってもローズは楽屋の壁にその頃の写真を懸^かける。長い髪のかげから片方の乳房を出し、片手でもう片方の乳房を前に垂らした髪の上から押えている写真だ。

「これ、誰？ 座長？ ふーん」

リリーははじめてその写真を見たとき、そういった。

「へーえ、これが座長？」

ローズがリリーを虫の好かない奴だと思ったのは、その時からである。だからリリーが黙って一座を出て行ったということを知っても、ローズは、

「ふん、そうか」

といっただけだった。

それをローズに知らせたのは文芸部の大平^{おおひら}である。文芸部といっても一人しかない。文芸部は衣裳係や売りこみや台本作り、振付^{ふりつ}け、賄^{まか}いを兼ねる。小屋から小屋へ移る時の、ワゴンの運転手もする。汽車の切符の手配もする。そして、大平はローズの愛人だった。大平はローズより七つほど年が下だが、大阪のミナミには羊羹屋^{ようかんや}の家つき娘の妻と中学校一年の女の子がいる。

春野リリーはこの一座ではローズより人気のあるストリッパーだった。リリーが抜けると、

客足は落ちるだろう。リリーは貧弱な身体をしている。肌は黄味がかっていて乳房も平凡だ。しかしリリーは「オープン」がうまい。大胆に見せるだけでなく、客を挑発するテクニクを心得ている。リリーが舞台に立つと、小屋の天井まで熱気がたかまった。リリーの動きにつれて客は右に左に身体を倒し、あるいは仰向き、あるいは覗き込んでリリーの股の奥を見定めようと我を忘れる。リリーは、客に我を忘れさせる、天性のテクニクを持っていた。それは一人一人の淫靡な好奇心を団体競技の快い興奮へと昂める指揮力ともいべきものであった。リリーはかけ声をかけながら応援団長のように走りまわり、それにつれてその後を追う客席は風の中の稲穂のように揺れ動くのだった。

「リリーがぬけたら、困るなあ」

大平は思ったがローズは何もいわなかった。

「社長はブツブツいうやろな」

社長というのはこのアメリカ座の小屋主のことである。アメリカ座はローズ一座を四人で目だて五万円という条件で買ってくれた。その条件は今ではいい条件としなければならない。それもこの町でのリリーの人気を計算したからのことなのだ。十日替りの契約で今日は二日目だ。

「そうか、て……すましてられたら困るなあ……座長として考えてもらわな……」

大平は愚痴っぽくいかけたが、それ以上はいわなかった。

「うちはストリップパーや。紅ローズや！」

ローズのいう言葉はもうわかっている。

「舞台以外のことはうちに聞かさんというて」

ストリップは芸術だという信念をローズは持っていた。芸術家であるローズは一座の金の配分のことやおかずのよし悪しなどの話は聞きたくないのだ。

「何とかしてもらわんと困るなあ」

アメリカ座の社長は大平を呼んでいた。

「ほかの子ならとにかく、リリーやからなあ。客を呼んどるのはローズやないのやで。そこをローズは何と思とるのや、え？」

リリーは前々からローズの芸術家気どりに反発していた。リリーはローズから踊りの稽古をしないといって始終、説教をされていた。振付もローズが教えた振付けを平気で無視して下品な我流にしてしまう。しかしリリーが一座を出て行った直接の理由は、リリーがローズの前でアグラをかいて煎餅せんべいを食べたということがもどだった。

「うちは行儀見習いしいにストリップになつたんやない！」

そういつてリリーは出て行ったのだ。

リリーが出て行く前にはアケミがやめた。アケミは小屋の裏にある連れ込み宿で男と寝ていて出番に遅れ、ローズに叱られた。

「何だい、手前は男に用がなくなりかけてるだけじゃないか！」

アケミは太平にまで八ツ当りをして出て行った。

「平さん、あんなババアとやって何がオモロいの？ あんたも変った男だねえ！」

リリーが出て行った翌日から、肌寒い秋の小雨が降りはじめた。客足が思わしくないのでその雨のせいもあった。だがアメリカ座の社長はリリーがいないせいにした。アメリカ座の社長は機嫌が悪くなるとダミ声になる。そのダミ声を聞くと太平は気が滅入った。

「ローズに特出しやってもらおやないか。そういうてくれ。わしの方は趣味や酔狂でストリップかけてるんやない。芸術やたら何やたらノンキなこというてる時代やのうなったんや。時代も変ったし、わしも変った。ローズも変ってもらわんとあかんや。客はローズのチチ見に来るんやないわ。おなごのアソコ見に来よるんや。アソコ見せん女が舞台ウロウロしとったって、うるさいばかりや、今の客は……」

「わかってま。わかってま。ローズにいいまっさ」

太平はそういつて事務所を出た。しかし彼はそれをローズにいう気はなかった。いったところでローズはただ、

「ふん」

というだけであることはわかっていた。そしてローズに「ふん」といわれると、大平はもうそれ以上にどうすることも出来ない自分の非力を感じるばかりだったのである。

2

秋雨の中を大平はリリーの代りのストリッパーを探し廻った。リリーの穴を埋めるためには、リリーより以上にオーブンのうまいストリッパーが必要だった。しかし思わしいストリッパーはなかなかいない。どこにも所属していない一匹狼のストリッパーを臨時に入れると高くつく。高くつくばかりでなく、ローズ一座と聞くとたいいていのストリッパーは尻込みをする。

「へえ、まだやってるの？　ローズは……」

と知っているくせにわざと驚いたようにいうストリッパーもいた。

「もういいかげんにやめた方がいいよ。年を考えてさ。お客のためだよ」

リリーが抜けたので大平は坂田肉店の親爺を連れて来て、コメディをやった。肉屋の親爺は素人だが舞台でふざけるのが好きだ。彼は大平が頼むといつも二つ返事で口のまわりをスミで黒くし、ハゲ頭を椿の葉っぱで磨いてやって来る。彼のすることは大体二種類しかなかった。

一つはお寺の坊さんがお経を読みながら後家さんをくどくコメディで、もう一つはインボテン

ツのナポレオンがジョセフ・ヌに虐められるコメディである。大平は女装して後家さんとジョセフ・ヌになった。二人は熱演したが、熱演すればするほど客は笑わない。それというのもこの市のストリップファンはもうこの二人のコメディには飽き飽きしているからだった。

「肉屋、帰って肉を売っとれ！」

と野次が飛ぶ。しかし肉屋の親爺はその野次が飛ぶとはりきって、却って執拗にやりたがり、その後で大平はアメリカ座の社長に文句をいわねばならなかったのである。

大平はアメリカ兵のオンリーをしていた女が金に困っていると聞いて、彼女が勤めているバチンコ屋へ出かけて行った。

「なにイ、踊れんでもええ？ 股ひろげたらええてか！」

気の荒いその女はバケツの水を大平にぶっかけてどなった。

「お前のヨメはんのを見せたりイ」

—— いったい俺は何のためにこんな所でこんな目にあって我慢しているのだろう……

大平はバケツの水をぶっかけられたジャンパーの肩を、更に秋雨に濡らしながら傘もささずに歩いていった。大阪へ私鉄で一時間ばかりで行けるこの町は、鉄工の町だ。かつては近くにアメリカ軍のキャンプがあり、貨物船の港もあった。空は煤けて町はくろずんでいる。海の水は鉛色に淀み、赤錆色のクレーンが濁った空に向ってつき出ている。

大平は人々からローズの「ヒモ」と呼ばれていた。彼は大阪へ帰れば、のれんのある羊羹屋の店がある。番頭や小僧は今は社員という名目になってはいるが、家へ帰れば彼は「旦那はん」と呼ばれる身だ。それなのに彼は便所の匂いが二階の楽屋まで漂っている湿った坊主畳の楽屋で、惣菜屋そうざいやから買って来たてんぶらを電熱器であたためてローズと夕飯を食べる。風呂から上ったローズの身体に蜂蜜を塗りたくってマッサージをしてやる。一座のために次の小屋を探しまわり、妊娠したストリッパーの身代り亭主となって病院へ行くこともある。ストリッパーのヒモといわれている男は少くないが、彼らはヒモとなることによって働かずノラクラと暮しているのだ。だが大平はローズのヒモになった時から、働きづめに働いている。彼は羊羹屋のムコ養子として働くのがいやで逃げ出した。こんなに働く気があるのなら、何も大阪の羊羹屋を飛び出すことはなかったのだ。

秋雨の中を大平が歩いて行くと、向うから坂田肉店の親爺が急ぎ足に歩いて来るのとはったり出会った。

「よう、ヒラさん、今、あんたをたんねて行くところや」

坂田肉店はいった。

「女がいよったんや。女が……しろとや。年は二十一や……」

「しろと？」

大平はいった。

「しろとは間に合わんな」

「本人は明日からでも出る気やで。泊めて食べさせてもらたら、そんでええというてるんや」

「しかし、しろとじゃしようないな」

「けど、なんぼでも出すというてで」

「えっ、出す？」

「そうやがな」

肉屋は得意そうに大きな鼻をうごめかした。

「どねんして出して見せるのんか、それさえ教えてもらたら、なんぼでも出します、いうとんのんや……」

「とにかく、会おう！」

大平は急いだ。その娘は坂田肉店の隣金馬車というレストランバーのウェイトレス募集に応募して来たのだという。大平が金馬車の裏口から入って行くと、支配人室から顔見知りの金馬車の支配人が顔を出した。

「こら、支配人さん、えらいお邪魔します」

「どうぞ、どうぞこっちへ来て、見てやっとなはれ。わしはお宅には向かんのやないかと思

うんやけど、坂田はんがともかく大平さんに知らせるいうて乗気になつてはるもんやさかい……」

支配人はいった。

「うちで断つたら、どんなことでもするから仕事探してくれいうて泣かれましてな」

大平は部屋に入り、女を見て、

「うーん」

と唸った。

「唸りはるキモチ、ようわかるけどな」

肉屋がいった。

「オープンでも何でもする、一生懸命出します、というもんやよつてにな」

秋だというのに娘は大きなアジサイの花のついているネグリジェのようなずん胴の夏服を着ている。彼女は椅子から立って大平にお辞儀をし、

「服、脱ぎますのン？」

と肉屋に聞いた。

「いや、いらん。結構」

大平はいつて思わず大きな溜息をついた。